



精神神経学雑誌（以下、本誌）では年次学術総会のシンポジウムの一部について講演内容を「特集」として論文集の形で掲載しています。今回の編集後記では「特集論文」に関して会員の皆様に紹介し、特集論文をご一読いただきますようお願いいたします。

年次学術総会でのシンポジウムのテーマは学会各種委員会や年次学術総会のプログラム委員会で選択されたものであり、その時々的重要な課題が網羅されています。特集論文はシンポジウムの講演内容をもとに論文形式に書き直されており、簡潔で読んでわかりやすくなっています。当該分野の多職種のエキスパートの意見を文章で確認できますので、総会会場で聞き逃した場合や、講演内容を再確認したい場合に便利です。精神科医療従事者に必要な知識のアップデートの簡便な手段と思います。

本誌編集委員会では選択されたシンポジウムの演者に原稿執筆と投稿を依頼し、投稿された特集論文は査読しています。特集論文が症例報告を含む場合は、投稿規定に従い原則として本人の同意が必要とされています。本誌は発行1年後には電子版で一般公開されますが、現状では症例記述のある論文は電子版での一般公開を控えています。このため、論文数編から構成される特集では、症例記述を含む論文のみが電子版では一般公開されないということが起こります。

2019年新潟総会のシンポジウムを基にした特集は122巻(2020年)から123巻(2021年)に掲載されています。特集タイトルのみを列挙しますと、122巻には、「子どもを虐待したくてしているわけじゃない！」(第2号)、「双極性障害の予後を悪化させる要因と対応」(第3号)、「精神疾患の背後に発達障害特性を見いだしたとき、いかに治療すべきか」(第4号)、「近年の自然災害から学ぶ精神保健

医療支援の実際」(第5号)、「定型的な薬物療法に行き詰まったときの新たな治療戦略」(第6号)、「高齢者に求められる精神療法とはどのようなものか」(第7号)、「患者の違法薬物使用を知ったとき、精神科医はどうふるまうべきなのか？」(第8号)、「精神病理学の古典を再読する」(第9号)、「ICD-11に収載された複雑性PTSDの理解と治療」(第10号)、「精神科専門医に必要な精神療法の学び方」(第11号)、「精神科医療における身体拘束の現状と課題」(第12号)でした。いずれも具体的で興味深いタイトルです。

123巻には、「刑事責任能力鑑定の方法」(第1号)、「うつ病からの復職就労者の再発再燃を防ぐために精神科医と産業医ができること」(第2号)があり、第3号以降は、「日常精神医療が自治体の自殺対策計画に貢献できること」、「『共同意思決定』を生む対話についての検討」が掲載されました。

さて、2020年の第116回本学会学術総会はCOVID-19の蔓延によりWEB開催となりました。学会開催業務は大変であったと拝察します。私は夜間と休日に自宅でシンポジウムを中心に集中的に視聴しました。現地参加の時には聴講しきれない数のシンポジウムを聴講できました。本誌の特集でその内容を再読できることを楽しみにしています。

COVID-19の蔓延は精神科医療に大きな影響を及ぼし、サービス利用者への時間をかけたきめ細かな支援が困難になっています。また、地域コミュニティでは子どもの支援や連携への影響が深刻です。私の住む地域では、桜まつり、秋まつり、子どもを対象とする手打ちうどん教室などの自治会行事がすべて中止となり、住民同士の連携が困難になっています。精神医療従事者や地域住民としての責務を日々自覚しているところです。

有馬邦正